

本屋巡りの悦楽

東京大学大学院法学政治学研究科教授 交告 尚史

昔神戸で暮らしていた頃、1980年代の後半から1990年代に入った辺りまでであるが、学会や研究会で東京に出るのがとても楽しみであった。なかでも、年4回開催されるフランス行政法研究会は格別であった。1985年に神戸商科大学（現兵庫県立大学）に就職してからは、割り当てられた旅費をすべて注ぎ込んで、年に3回この研究会に参加するようにしていたほどである。研究会自体が刺激に充ちていたし、その後の懇親会で憧れの先生方のお話を伺えるのが堪えられない喜びであった。

しかし、こうして東京に出てくることの愉しみはそれだけではなかった。フランス行政法研究会は土曜日の3時から開催されるので、朝早目に神戸を発って昼頃東京に着けば、会場校の位置にもよるが、1時間ぐらいの余裕は何とか生み出せる。そこで胸を弾ませて出かけるのが、神田駿河台下、まずは崇文荘という洋書の古書店である。入ってすぐ右側の2棚がLAWのコーナーであり、英、独、仏の法律書が並んでいる。それらの背中を舐めるようにして視線を移して行く。欲しい本に出会うことは滅多にないが、それもまたよし。次に目指すは、国際書房である。当時、国際書房は、崇文荘からちょっと入り込んだところにあった。階段を上がって扉を開けると眼鏡のおじさんがいらして、チラッと顔を上げられる。そんなことには気にせず、まずは行政法のコーナーで美味しそうな本を探す。この店では時々古書のセールもしているが、思わぬ掘り出し物に巡り遇うこともあるので、これは絶対に見逃さないようにしないとイケない。今、手元にArthur Kaufmann, Analogie und "Natur der Sache", 2. verbesserte und durch ein Nachwort ergänzte Auflage, Heidelberg 1982. という本がある。裏表紙をめくると私の蔵書印が捺してあって、「'90.12.25 国際書房」との書き込みがある。この日に国際書房で買い求めた訳であるが、この日付であれば、この年最後のフランス行政法研究会に出てきたのだなということが直ぐに判る。そこで、以前会員に配付された「フランス行政法開催記録」を開いてみると、1990年12月26日に村上裕章先生が報告されていることが確認できる。私はそのご報告を聴きに前日のうちにやっていたのだろう。

ところで、行政法研究者の私が何故このような法哲学の本を買ったのか。日本語であればまだしも、ドイツ語の法哲学など読むはずもないのに……。実は、この本の表紙を繰ると、“Joseph J. M. van der Ven in aufrichtigen, freundschaftlichen Verbundenheit. Arthur”と献辞が手書きされている。そして、その下に、Ult de boekerij van prof. mr. J. J. M. van der Ven という印が捺してある。私は、これに惹きつけられたのだ。献辞の方がドイツ語であることは分かる。「誠実で友情のこもった絆のために」ぐらいか。印鑑の方はオランダ語？ともかく、van der Venがどういう人物であるかを私は未だに知らない。結局、思ったとおり、これまでこの本を開いて読む機会は一度もなかった。しかし、この文章を読んだどなたかがvan der Venのことを教えて下さるとしたら、それはまた大きな喜びである。そのときは、この世を去る前に本書をその価値の解る人に譲り渡そう。どのみち私が蔵書印を捺して購入日を書き込んだことで、古書としての価値は下がってしまったが……。